

浮図田と仏足石

寺院の南側に整然と並ぶ石像は、総称して「浮図田」と呼ばれている。これらの石像は、いずれも寺の支援者からの寄贈によるもので、そのほとんどが数百年前のものである。

極楽堂の近くにある高い五輪塔は、仏教の宇宙観である地・水・火・風・空の五大要素を表している。小さな石碑の中には塔の浮き彫りのようなものもあるが、その意味は同じである。

1988年に禅室の北側で無秩序に積み上げられていた小碑が発見され、その後、多くの小碑を組み込んだのが浮図田である。石塔は墓標ではないが、墓石と同じように、それぞれの石碑には、その一人一人への祈りが込められており、良い生まれ変わりができるようにと願われている。仏殿に安置される石塔の多くは僧侶のために作られたものであるが、中には一般人が生前に依頼したものもある。また、浮図田には旅人や庶民の守り神として知られる地蔵菩薩の小像も数百体ある。地蔵は動物や餓鬼などに生まれ変わった人々を救う存在でもある。中世の日本では、お地蔵さま身近な存在であり、庶民の信仰対象であった。現在でも、亡くなった人、特に子供の供養のために地蔵尊が作られることが多い。毎年8月23日、24日に元興寺で「地蔵会」が行われる。浮図田には1000個以上の燈明皿が飾られ、極楽堂では無病息災の祈願が唱えられる。

仏像や塔が立ち並ぶ中、浮図田の東端にある低く平たい石碑がひととき目を引く。これは歴史上の仏陀、釈迦の足跡を表現した「仏足石（ぶつそくせき）」である。このようなモニュメントは、古代インドで紀元前2世紀頃から釈迦を象徴するものとして信仰されていたと考えられている。2012年、日本・スリランカ友好協会が、日本とスリランカの親善と永遠の友好の証として、この足跡をガンゴウジに寄贈した。この足跡には、アジアで肯定的な意味を持つ卍（まんじ）を含むいくつかの仏教のシンボルが刻まれている。